



Veritas No.43(2010.3.17)

目次 (敬称略)

<「読書の愉しみ」―特集に寄せて―>

真栄平 房昭 (図書館長)

<特集 国民読書年によせて>

原田 園子

長尾 ひろみ

出口 真紀子

上西 妙子

村越 直子

奥田 紗史美

張野 宏也

三宅 志穂

<本の花束 ―その3―>

中西 政明

<研究室から>

古庄 高

<神戸女学院大学図書館架蔵フランス語書目雑談 V >

柏木 隆雄

無断転載を禁ず

## ＜読書の愉しみーアラビアのアデンに旅する夢ー＞

真栄平 房昭 図書館長 総合文化学科教授

人生の折々に魅力的な本と出会い、見知らぬ世界に旅することは、読書の愉しみの一つであろう。そのような出会いを通じて、読者は知的興奮を味わう。それは、とても遠いところまで連れて行ってくれる船に乗るように魅力的である。

ここで紹介する『特命全権大使 米欧回覧実記』（岩波文庫）は、1871（明治 4）年 12 月に横浜を出港し、アメリカやヨーロッパ諸国を歴訪した「岩倉使節団」の見聞体験をまとめた名著として知られる。本書が語りかける魅力は百年以上たっても色あせることなく、読者をイメージ豊かな旅に誘う。

岩倉使節団の旅は、世界の交通がまさに画期的発展をとげた時期にあたる。明治維新の翌年の 1869 年に開通したスエズ運河は、アフリカ南端を迂回する従来の航路を約四割も短縮した。岩倉使節団も利用したアメリカの大陸横断鉄道とスエズ航路の開通は、地球を一挙に狭くした。「文明」を象徴する鉄道と蒸気船を組み合わせることにより、短期間で世界一周することが可能になったのである。フランスの作家ジュール・ヴェルヌの小説『八十日間世界一周』が大評判になったのも同時代である。



『「脱亜」の明治維新』より図版転載 map\_2

『米欧回覧実記』の執筆に情熱を傾けた久米邦武の「自筆草稿」をはじめとする貴重な資料が、東京の久米美術館に所蔵されている。それらの資料を同学有志と一緒に見学するため、JR 目黒駅前の美術館を訪れたのは、2009 年の師走であった。そこで眼にした草稿類は、活字になった『米欧回覧実記』からは感じられない生々しい臨場感に溢れていた。

特に印象に残るのは、久米が旅先のパリで買い求めた赤色の手帖である。鉛筆でびっしりと書き込まれた細かい文字から、緻密な観察と筆記力だけでなく、彼の息づかいや体温まで感じられた。1年10ヶ月にわたる旅で克明なメモをとり、『回覧実記』をまとめあげた旺盛な好奇心と使命感が、この小さな手帖に凝縮されているように思えた。久米は初めて眼にした西洋に新鮮な驚きを感じながらも、それを丹念に記録にとどめる冷静さを忘れない。『回覧実記』全巻を通していえることだが、彼の西洋認識にみる「新鮮な感受性」と「冷静な記録性」が、報告書の価値をいっそう高めている（田中彰『「脱亜」の明治維新—岩倉使節団を追う旅から』NHK ブックス、1984年）参照。

1873（明治6）年7月20日、使節団一行はフランスのマルセイユを出航し、帰国の途に着いた。郵船「アウア号」に乗って地中海のナポリ、エジプトのポートサイドを経て、開通したばかりのスエズ運河を通り、アラビア半島南部のアデン（Aden）に寄港した。地中海、紅海、インド洋を結ぶ貿易港として古くから栄えたアデンは、インドへの航路上のきわめて重要な港であった。

『回覧実記』によると、8月1日午前6時半に一行はアデン港に投錨した。そこで久米は船上から遠望したアデンの風景を手帖にスケッチしている。その極めて写実的で印象深いスケッチは、おそらく真夏の太陽が昇る早朝に描かれたと推察される。アデンの風景を想像するたびに、わたくしは「アデン、アラビア」という呪文を寢言のように唱える。すると、不思議な「夢」を見るのだ。久米と一緒にアラビアの砂漠から大洋へ乗り出す夢である。『回覧実記』のおかげで、地中海からアラビアまで楽しい世界旅行を一晩で体験し、朝には爽やかな気分が目覚める。皆さんにもぜひ一読をおすすめしたい。

## <特集 国民読書年によせて>

原田 園子 英文学科教授

### 出会いと旅立ち

この3月末で定年退職を迎える私に Veritas 編集委員会より、2009年度最後のニューズレターへの寄稿依頼があった。タイトル例として上記他「読書と私」、「図書館と私」を頂戴した。今、お別れのご挨拶文をいくつかしたためているなか、本学での10年プラス37年間にいろいろな側面から思い起こしている。頂戴したテーマでも少し振り返ってみよう。

今年は「国民読書年」であるともうかがった。子どもたちや若者の活字離れが指摘されて、何年か前からこどもの読書活動が推進されてきた。図書室で読み聞かせや、朝授業開始前に10分ほどの読書時間をおき、読了冊数の記録をさせたりもしている小学校が少なからずあるが、こういった機会に本との“出会い”が望まれている。

私の読書の楽しみは、幼かった頃、お留守番のときのお土産やプレゼントとしてもらった絵本の頁をワクワク感をもって捲っていくことから始まった。小学生になって、姉のお古の岩波少年文庫に夢中になった。子どもや動物、お姫様や王子様の悲劇や不思議な冒険。見知らぬ海外の国々や人の有様に想像力を駆り立てられた。こういった読み物が実は大人向きのものであったことを、そして、ことば表現の面白さと奥深さを知ったのは大学に進学してからであった。(『不思議な国のアリス』や『Snoopy』からの台詞が言語学入門書で例として使われている。) 中高生の頃は、出始めた世界名作全集を毎月楽しみにしていた。(『聖書』や『聖書物語』は多くの内外の文学作品を読み深めるのに欠くことができない。)

図書館は、私にとって調べ物をする場所であった。大学時代も留学時代も読みたい小説や随筆本は借り出して自分の部屋で読むもので、図書館では、特に留学時代は長時間籠って、指定図書を読み、レポートのための読書と抜書きをした。

本は、作家との出会いでもある。偶然手にした、あるいは新聞の書評欄で知った書を読んで、興味深ければ、そのテーマや作家のものを次々と読み始め、新刊を待ち望む。このようにして作家自身や登場人物の考え、思い、物の見方に接し、自らの思考や感性の広がりともなる。時には生き方の指針ともなるであろう。このような出会いがいくつかあった。

では、旅立ちとは？傾倒していた作家の考え方や生き方が何か違うように思えてきたり、その書き物やテーマに飽きてきた時がそれにあたることもあろう。それは、自らの物の見方が変わってきたことでもあろうか。しかし、かつて夢中になった本は、何年も経ってから、読み返してみたいことがある。その意味では、旅立ちは無いことになる。書物からのそれは、生きていく限り無いように思える。自らを含め人という存在を知り求め、内面的世界を広げ深めるのに、読書は今もってそこからの旅立ちのないものである。

長尾 ひろみ 英文学科教授

## 読書と私

私は神戸女学院大学英文学科で通訳を教えてきました。私自身も長い間、法廷通訳をしてきました。これは裁判所での通訳ですが、外国人が刑事事件にかかわって警察での取調べ、検察庁での取り調べの後、起訴され、裁判所での審理に入ります。その裁判所での通

訳のことを法廷通訳と言います。

通訳とは言葉の通じない二人（2団体）の間に入ってコミュニケーターとして仲介する役割です。では言葉を知っていたら通訳できるのかというと、ノーです。例えば一つの単語の対訳を知っているからと言って通訳が出来るわけではありません。文章を理解できる能力が必要です。

ではどうやって言語運用能力を身に付けるのでしょうか。いろいろある中で必要不可欠なことが、自分の母語をしっかりと確立することです。私たちは、日本語は上手く喋れていると思っています。本当でしょうか。ただあなたの友達と不自由なくコミュニケーションが取れているからそう錯覚してしまっているのではないのでしょうか。高等な内容が議論できますか。また政治、経済、環境問題、国際関係など、自由に話題にするほど知識をもっていますか。全てにノーでしょう。

私はKCの通訳プログラムでは、二年生の通訳基礎段階を担当してきましたが、必ず学生に課したのが、「新書を週一冊読んで一枚に要約する」ことでした。何故新書？新書は理論展開をした論文だからです。そして年間50冊ほど本を読み続けることで、言葉に慣れて欲しいという意図がありました。

結果は、ほとんどの学生がしっかりと本を読んでくれて、図書館の図書の出冊数が急に伸びたそうです。二年生80名が取っかえ引っかえ毎週新書を読んでもらったのですから、新書コーナーも大繁盛。

もっと嬉しかった事は、一年たって学生が「先生、本を読むのが苦でなくなった」、「いろんな知識が身についた」と言ってくれたことです。本を友として自分を向上する楽しさを是非皆に味わってもらいたいと思います。特に英語の通訳をしようと思う人は、日本語表現が自然と豊かになるというお得なお副産物がついています。

是非、二年生で50冊新書を読んだ人、三年生になったらもう課題として出していない、、、といわず、今後も本を読むことを続けて欲しいと思います。

出口 真紀子 英文学科客員准教授

## 読書の習慣

「読書」という言葉の響きは昔から好きでした。初めて「読書」という言葉を知ったのは、ちょうどカナダから日本に帰国した小学校三年生のとき。日本の公立小学校に転校し、そこでは何もかもが新鮮でしたが、「読書」という言葉の持つ響きを幼いながらも大人っぽく感じたのが思い出されます。背筋を伸ばしてしゃきっとしなければ、という緊張感を覚えたのと同時に、何かとても大切なことをしている、という印象を強くもったので

す。「読書の秋」や「読書週間」のように日本には本を読むことにも季節感があるのも新鮮でした。

小学校四年生のとき、担任の先生が読書の習慣を促すため、生徒の読書量がクラス全体に一目でわかるよう、本を一冊読み終える度に、自分の名前の上にあるマスを一つ塗りつぶす、という試みを始めたのです。読書量が増えると自分の棒グラフが高くなる、というしくみです。「読書」という自主性や個人の動機付けに基づいた行為と「クラスメートとの比較」という競争の原理を組み合わせるようなことは恐らくカナダでは奨励されないたぐいのものだと思います。しかし、私はこのような目標があると意欲がわくタイプのように、この一見相容れないような組み合わせの試みがきっかけとなり、学校の図書室に頻繁に通うようになりました。最初はマスを埋めることが楽しかったのですが、徐々に読書自体を楽しむようになり、自然と読書の習慣が身についたように思います。四年生ですから、『子鹿物語』、『若草物語』、『ふたりのロッセ』など子供向けに書かれた世界の名作を読んだり、『椋鳩十動物童話集』を片端から読んだりしました。読んだ量はクラスの中でも中の上くらいだったでしょうか。その中で、読書量のダントツ・トップは三上さんという女の子で、彼女の棒グラフは常に私たちの倍以上の長さに伸びており、いつもすごいなあ、本当に本が好きなんだな、と私は刺激を受けて一層頑張ろうと思ったものです。

結局のところ、きっかけは何だっていいのです。お友達がみんな読んでるから自分も読まなくては、という理由でもいいし、読んだ本の数を競うことだって構わない。本を読むようになるきっかけは人によってさまざまだと思いますが、皆さんもぜひ自分にとって意欲が湧く方法を見つけて、大学生活の中で読書の習慣を身に着けてほしいなと思います。

上西 妙子 総合文化学科教授

本に向き合って

3月に入ろうとしています。退職にあたっての大きな仕事は、研究室の明け渡しです。本の整理をしなければなりません。一ヶ月前は余裕をもって、二重、三重に押し込まれた棚の本を眺めていました。一週間くらい前は、本を手に取り、楽しみながら分類して行き先の違うダンボール箱に詰めていました。そして3日前からは青ざめもして、私は整理を進めています。何が問題なのか？ 片づけても片づけても減らない本の山、その量に圧倒されながら、それぞれの本に向き合って知る「悩ましさ」とは、「私というもの」を考えさせられる苛酷な労働でした。それは、読んでいないもの、理解し切れていないもの、今後の課題としてとっておくべきもの、それらと「私の容量と質」がなんとなくおぼろに向き合

っているイメージのなかでの作業でした。時間が迫っているので続けざるを得なかった作業のなかで、ひとつの決心をしました。それは、「これから本は、図書館で」ということです。教職を仕事としている間、つまりいままでの年月ですが、関心のある、そして必要な本は自分の所有物として持っていたい、手元に置いておきたい、とずっと思っていました。本との距離の短縮は、作業時間の短縮であり、また効率の良さであると考えていたからです。本が「もの」として身近にあると、安心なものです。しかしここ数日、改めて、「本を所有する」ということ、また「本とともにある」ということに関して、考えなおしたのです。

## 1. 図書館

フランスでは、本は「図書館で読むもの」ということを教えられました。博士論文の指導教官であったフランス人の先生の自宅に伺って、蔵書の少なさに驚いたことがあります。彼らは、読む、書く、そのどちらをも図書館でするのです。私がパリで博士論文を準備していた頃のフランス国立図書館は、パレ・ロワイヤルのすぐ近く、ということは、コメディ・フランセーズの近く、おおざっぱに言えば、ルーヴル美術館とオペラ座の間にありました。ここへの出入りですが、フランスの公的な教育機関に在籍する人が、「この人物は、これから有用な仕事をする」と保証する文書を出してくれば、それで会員カードを発行してもらえます。私は論文指導の先生に、この図書館前にあるレストランによびだされ、食事をしながら、「これからは、この図書館で勉強するんですよ」と言い渡されました。

私は多くの時間をそこで過ごすことにはならなかったのですが、そこは、勉強の場ということにとどまらない、「学問」という文化が形式をとっている場でもありました。入館すると、まず、席を決めます。それから書籍カードを調べて、読みたい本を書き出して受付の窓口で提出します。自分の席で待っていると、何冊でもそこまで配達してくれるのです。フーコーをそこで「見た」と言った人もいました。それから、姿勢を崩さず集中して、時間のたつのを忘れて人はそこで「学」に没頭する役割分担としての仕事を自らに課すのです。「知の作業」が形として分業化され、国籍を超えて学の制度として適用されているということでしょう。

昼食や休憩で退室するときも、その席は保留できます。この図書館の場所は、先に説明したとおりパリの賑やかな場所にありましたから、レストランもカフェもまわりに多くあります。しかし特に正門まえの数軒は、昼時には、隣人と肘がつくくらいの混雑でしたが、そこは活発な議論と黙考の空間も混ざり合うという感じで、その雰囲気懐かしく思い出します。

この図書館空間で感じられたのは、各個人は、知の体系に連なる意識をもって修行を重ねるのだという緊張感でした。人類の知に連なる意気で進める研究ならば、共有の図書館

の空間でするものですよ、ということになるのでしょうか。どこから飛んできたのか分からない鉄砲玉のような、新規で鋭い思考とは別に、そしてそれらにしても、この体系に失礼のないように、自省を重ねたうえで、共有されるべきだという信念がある世界だと感じられました。

この国立図書館に出かけるのは、文化的で荘重な儀式でもあったわけです。そこで、よりとっつきやすい、パンテオンの横にあって夜 10 時まで開いている「サント・ジュヌヴィエーヴ図書館」には時々でかけました。ここは、本の配達もなく、ごく一般的な図書館でしたが、夜の静けさの中で、本に向かって集中している人しかいないという場の快さと、外に出たときの照明を受けたパンテオンとそのあたりの美しさは格別でした。エッフェル塔も遠くに見えます。そしてその光景が美しかったのは、それが、文字を追って考え続けた後の飽和感において捉える光景だったからということもあるのでしょうか。

「本は図書館で」という作業の形は、本を扱う作業を時間にそって単位化し、集中して各部分をし終えていくということでしょう。私は、退職後は「教育」活動から解放されることとなります。ということは、「商売用」の多種の本を手元に置かなくてもいいということです。そのことは、私に解放感を与えてくれました。手放す本も多くあります。一方、未完成の研究を継続するためには、やはり手元に置くべき文献が数多くあります。しかし、これからはテーマを限定して集中できるのですから、より効率の良い頭の動かし方をして、「基本外」に関しては、図書館で単位化された作業によって進めていきたいと思っています。

## 2. 書店

書店に関しては、パリで二種類の心躍る経験をもちました。古本屋と小書店です。かつてはやはり、日本からフランスに行って研究をする場合には、古本が探索の対象であったのです。歪んだ錯覚なのでしょうが、夕方にかけて、そしてまた夕食後、オデオンあたりの古本屋で古本を手にとって過ごした時の、優美で厳粛な充溢感を思いだします。本をめぐる、先に述べた国立図書館に満ちていた「共和体」というものの存在が、そこではより親密な形で感じられたのです。言葉を交すことはないにしても、なにかの交流があり、尊重しあう落ち着いた雰囲気、その小空間にはあったのです。

他方、パリでも地方でも独特の魅力があったのは、「詩・散文詩の本」、または「美しい本」をおいている小さな書店でした。言葉と絵がひとつになったもの、装丁が洒落たものも多く、それらは「物」としての美しさももっていました。これらの書店は、午前零時を過ぎても開いています。日本では出会わないような異様に静かな店主が、小さな声で応対してくれます。そこにも、「ポエジー」の不滅の輝きをめぐって、共和体が成立していました。

### 3. 書棚

「これからは図書館で本を読もう！」 最初にたしかに、そう言いました。しかし、本が詰め込まれてはいず、多様な相貌をみせて並ぶ本のタイトルをざっと見れば、その個人の宇宙での位置が感じられるような書棚を、やはり持ちたいと思っています。今回、本の整理をするに当たって、「手放せない本」の質というものに気がつきました。それはやはり、「魂が語る」という質を持つ本、「人の時間」に向き合う質を持つ本です。数次にわたる選別を経ても、蔵書として持ちたいピラミッドの上のほうに、じっとその位置を占めている本というものがありません。

去年の春、中部フランスのイタリア国境にちかい小さな町の、そのまはずれに住む人を訪ねる機会がありました。ネパール、インドの宗教の専門家で、今はソルボンヌで教える女性のお父さんです。彼女が、「どうも」の一言と笑顔だけで2週間の日本滞在をしたとき、このお父さんのことがよく話題となりました。まとめれば「素敵なパパ」という印象を、私は強く受けていました。私は、頭がいい人というものを考えるとき、実務能力に加味されたエスプリ、そしてセンスの良い分析力と判断力を持つという点で、フランス人には非常に魅力的な人がいると思っています。このお父さんは、元超高級官僚ということでしたから、私は出会いをとて楽しみにしていました。

印象深かったのは、この方の書斎と書棚です。その家は、元は農家と思えるどっしりした構えの一軒家で、背後には斜面ともいえるような丘があり、しかし前面に展望があるわけではない立地、つまり、私には、そこは外部に目を向けて気楽にぼんやり日々を暮らせるような空間とは思えませんでした。そして、くすんだ大きな暖炉のある居間の延長に、書斎と書棚がありました。娘が京都で世話になった（彼女は、私の自転車を仁和寺で盗られました）ということもあったのですが、「まったく対等に！」、その方は私に蔵書（または、蔵書の構成）について語り続けました。モンテーニュ、ジュリアン・グラック。二作家の名前だけをあげます。関心を持たれたら、読んでみてください。それらは、老いることのない感性、しかし老いたからこそその知力、そして、決して投げ出さない思考への姿勢を人に語りかける書物であったと思います。

その家は他から離れ、むしろ閉ざされており、暖炉の光の重々しさは、軽いものを一切排除しているようにも思えました。もっとも、総勢7名での会話は、フランス式の極めて活発なものでしたが。それにしても、そこでの読書は、この方の現役時代にパリでつきまとわれた喧噪からこんなにも遠く離れて、今や直接的な「当事者」という意識を社会的に切り捨ててなされるものです。その書棚に私は、厳格なものを感じると同時に、楽しむことを知る軽やかさを見て、深く感銘を受けました。そういう書棚をもつことこそ、究極の「共和体」での約束ごとなのだと思えます。本との多様な関わり方があり、本との親密さは、私たちが勝ち取るべき生き方の姿勢でもあることを、私は思います。

村越 直子 音楽学科専任講師

## プライベート図書館

日本語活字が恋しくて仕方無かった思い出があります。19歳でバンクーバーに留学した当初、今のようにインターネットで新聞などは読めない時代でした。ダウンタウンにたった一軒あった「ソフィアブックストア」で立ち読みしてストレス解消です。お店のおじさん、お姉さんも皆それを黙認してくれておりました。雑誌で日本の流行を読み取り、「あ〜っつ！ふうっ〜!!!」とため息し、注目の新刊をじ〜っつと見つめて「とても買えない……でも、読みた〜い!!!」と毎週悩むのでした。当時はそういった本はかなりの値段で売られており、貧乏学生には手が出ないし、1カナダドルが180円という円の安さ。一冊の本が本当に贅沢でした。一番初めにその店で買った本は、いまだ忘れもしない！小澤征爾さん著の「ボクの音楽武者修行」でした。日本から訪れる人から機内で読まれた新聞・雑誌を頂いて、大事に大事に読み、その後しばらくは捨てられなかったほど日本語活字が恋しい日々でした。その後徐々に日本語の書物も手に入りやすい環境になっていくのですが、90年代の初めも日本食品店の古本コーナーで新品の値段（日本で買ったら）で売られる中古本をまじまじ見つめて又悩む日々。

日本人がカナダに増えてきたころ、本をたくさん持っている先輩と知り合い、彼の本棚を図書館と見立てて毎週借りに通いました。蔵書には心身について書かれたものが多く、そこから興味が広がってカラダについて深く考えるきっかけになりました。その後やはり読書大好きな別の知人からダンボール4箱の文庫本（かなりの量です）を一気に受け取り、今度は我が家が図書館状態でトロント在住日本人に喜ばれました。「直子文庫」です。ひとまわり上の女性の方のコレクションは大半が昭和の小説で、これまた海を越えた場所で読みますから、日本の情景にほろりと来ました。本当に懐かしい話です。

カナダ在住時代の日本への帰国は、自分の本、人に頼まれた本を買って帰るので、帰途スーツケースの重かったこと。それがこの10年で大きく変わりました。私も日本に住んでほぼ4年経ちますが、カナダの友人から書籍の注文は殆ど無く、お取り寄せしにくい食品を頼まれるくらいです。20代30代の私にとって心の支えになった本達。いっしょに日本に連れ帰ったものもありますが、殆どはいまだにトロント友人宅の片隅に置かせていただいている本棚に並んでいます。トロントに帰る度、「あ〜これこれ！」と懐かしく1冊を手に取り、自然にそれを読んだ時の自分が思い返され感傷的な気分になります。一度読んだ本を何度も読み返す性質なので、どれも、いずれ又ゆっくり読み返すのが楽しみです。

奥田 紗史美 心理・行動科学科専任講師

生きているから、読書する

読書は想像力を養い、知識を増やし、視野を広げると人は言う。それは嘘ではないかもしれないが、実のところ、安易に分かりやすい効果や価値を期待することは、いかにつまらなく読書するかというコツでもある。少なくとも私自身が「読書」と思っている行為では、もっと個別的なレベルで書物をどう体験するかの方がよほど重要である。つまり、実際に読書する個人の外側から、正しい読み方や読書の意義を決めることはできないし、それは自分で見つけていくものだということである。だから以下の話はあくまで私個人の例であって、もちろん、こうあらねばならないという考えを示したものでもない。

ともあれ、私の生活全般における読書の優先順位はかなり高いが、それはどうも衝動に近いような気がする。結局、読みたいから読んでいるだけ、と言ってしまってもよい。ただ、私には、ことばによって世界が記述されるということが、相当重要なようである。読書は、他者の、ことばによる、世界の把握の仕方を垣間見ることに繋がる。その把握の仕方は過剰だったり、淡白だったり、繊細だったり、大雑把だったり、意味にこだわったり、意味を越えていたりする。同じ世界に住んでいると思いきや、実はみんな異世界の住人でもある。そういう世界をのぞかないとすれば、それはたった一人で鏡に囲まれて暮らしているようなものだ（江戸川乱歩の小説みたい！）。そこでは見えるのは、自分が把握できる世界だけ。自分を把握するのも自分だけ。自分・自分・自分・・・自分って何？

それでは生きていけないので、本を読んでみる。沢山、切れ目なく、読む。そうすると、いつの間にか、自分が鏡の外側にいることに気づく。と同時に、自分がいかに無知で、無力で、ちっぽけかということも分かる。そうなればもはや、生き抜くためには、読まざるをえなくなる。自分はこの世界をどうやって把握し、どう関わりあっていくのか。他者によって把握された世界の姿を積み重ね、透かし、見つめながら、考えていくしかない。もちろん世界はことばだけから記述されるのではないし、ことばは意味にとらわれるが、意味は世界を秩序立てる。それを壊して、今度は自分のことばで世界を意味づけようとする。時に意味を越えたものも感じとり、受け入れる。今もそれを繰り返している。結局、ことばによって私は世界と繋がれるし、それはこの世界の中で生きるということでもある。

私にとって読書は、この世界で人間として生きる上で否応なく沸き起こってくる渴望のようなものである。読書をしない人生とは、他者を持たない人生にほとんど等しい。そういうふうに、私は読書をしている。

張野 宏也 環境・バイオサイエンス学科教授

## 読書から得られたこと

「読書をテーマに」という執筆依頼があったとき、私がまず考えたことは「どのような理由で依頼を断ろうか？」ということでした。実は、私は小さいときから本を読むことが好きではなく、小学生の頃は、本よりもむしろテレビ、学生時代は参考書、働くようになったら専門書と学術論文というように、まったく文学的な作品に触れたことはありませんでした。しかし、よくよく考えてみると、図書とは文学作品のみだけでなく、参考書や専門書も図書といえるのではないかと、そこまで解釈を拡大すれば何か書けるのではないかと机に向かいました。

私がはじめて就職したときの仕事は、“水質の安全性”に関して試験、研究をしている部署でした。大学時代は化学物質の合成に関する研究を行っていたので、“水質の安全性”と言われても水道水と河川水の区別がほとんどつかないくらい知識のないありさまでした。このような無知の私でしたので、言うまでもなく、その仕事の重要性についてはまったくわからない状態でした。そこで、先輩より渡された本が、“水質衛生学”という専門書でした。この本は、水の循環、飲み水の管理が不十分であることによる伝染病の拡大、安全な水を追及するための浄化システムの著しい進歩について、これまでの歴史の流れとともに詳細に解説した書物でした。これを機に、水道水の重要性を認識したとともに、その水源となっている河川水質管理の大切さについて興味を抱くようになりました。仕事に対しても、この本を読むまでは、お金をもらって働いているから仕方がないという思いで検査、研究をしていましたが、それ以後、人々の安全性を守るためにこの仕事をしているのだという強い信念をもって、自発的に環境改善や飲み水の安全性を追求するために研究を進めていけるようになったことを記憶しています。

本は、人の考え方や心を動かしたり、仕事に行き詰ったときなどに解決してくれる重要なツールであります。仕事帰りの疲れた時など、図書館や本屋に立ち寄り時を過ごしていると心が癒されます。最近残念なことに、公的機関が財政難のために、かつて少なくとも市町村にひとつはあった図書館が減少しているのが現状です。また、インターネットの普及で本の購入や文献等の検索が容易にできるようになったため、図書館や本屋が疎遠になりました。しかし、昔のように実際に手にとってさまざまな本や文献をみると、目的以外のことを発見することができ、新たな道が開けることがあります。私は、昨年この神戸女学院大学に着任したのですが、ありがたかったことのひとつはすばらしい図書館があったことでした。これからも、私の心の癒しの場として、そして問題解決の糸口をみつけるための出発地点として図書館を利用させていただきたいと思っています。

## マンガと私

最近、海外で日本の「マンガ（漫画）」が脚光を浴びています。冊子体のマンガだけでなく、登場するキャラクターのフィギュア（人形）を集めたり、キャラクターをまねた衣装を身につけたりすることも人気があるようです。ヨーロッパやアメリカでは、マンガは日本文化のひとつとして捉えられているような側面さえあります。

しかし、残念なことに私はこのマンガブームを理解することができません。というのは、私は子どもの頃、両親からマンガを読むことを禁止されており、中学生になるまでマンガ本を手にしたことがありませんでした。そのため、マンガというものに親しみを感じることはできないのです。もちろん、今まで一冊も読んだことがないということではありません。中学生になってお小遣いをもらえるようになり、そのころ大ブームだったマンガ本をこっそりと買って読みました。マンガを持っていることが両親に知られるとまずいので、表に出して処分することもできず、未だに部屋の押入の片隅に隠してあります。

なぜ、ここでマンガの話をしているのかというと、私の携わっている科学教育研究分野で、近年「マンガ」が研究対象になってきたということを紹介したかったからです。研究の対象になっているのは、著作権のあるマンガではなく、マンガで分かり易く科学に関連する事項や事象を紹介し、科学というものを社会に広く普及しようとする取り組みです。海外の学会に行くと、マンガによる教育実践事例を紹介する研究は必ずあります。ここ 2 年くらいの間に、日本でも実践事例が紹介されるようになってきています。ただ残念なことに、こうした研究が進んでいる中で、私はマンガの良さというものがあまり理解できません。

そこで、なぜマンガというものに理解を示すことができないのか、自分なりに考えてみました。その結果、マンガに親しむという原体験の機会が与えられなかったからではないかと思うようになりました。幼少期の原体験は、大人になって理解を示すことのできる範囲や深さに大きく影響するのです。子どもの時にできなかった経験や体験があれば、それに気付いたときに早めにやっておくと、その後の人生はより豊かなものになるのではないかと思います。

## ＜本の花束 ーその3ー＞

中西 政明 図書館職員

私が図書館で本の受入をしているところは図書館本館にある事務室です。課長の話によるとずいぶん前に事務室の部分は増築がなされ、「新館」と呼ばれるようになったそうです。そして増築前からある部分は「旧館」ということです。課長室や閲覧室がある北側が「旧館」で受入係や整理係がいる南側が「新館」とのことです。1984年シェークスピアガーデン横に地上4階地下2階建ての「図書館新館」が建設されてからは、図書館本館が新館と旧館に分かれているという感覚がなくなったのではないのでしょうか。図書館本館のことを「旧図書館」、図書館新館のことを「新図書館」と言ったり、表記されたりすることがありますが間違いです。念のため。

学報第10号（1959年7月4日発行）に当時の図書館長だった溝口靖夫先生が「図書館書庫の増築成る」と題して寄稿されています。一部引用させていただきます。「全体の体裁は旧館とできるだけ凡てをそろえる方針で計画され、増築された部分が木に竹をついだような不恰好がないように苦心されこれは見事に実現され、壁の色も煉瓦の模様も全くつぎ目がわからぬほど立派に出来上がった。」と書かれてあるとおり、課長の話聞くまで自分が1959年に増築されたところで仕事をしていたとは気づきませんでした。

『本館ヴィーナス像』 私たちが仕事している事務室は2階の閲覧室へ上がる階段の登り口にあるヴィーナス像の後ろ側にあります。事務室までたどり着くにはヴィーナス像に向かって左方向に行きます。すると扉が4つあります（その内のひとつの扉には私はいまだ触れたことさえありません）。ちなみにヴィーナス像を右に行くと課長室の扉と地下へ降りる階段があります。左方向へ行き4つある扉の中から一番右端の扉を開けてお入りください。課長室の扉が正面に見えますが、すぐに左に行きます。3メートルほど行くと開けられた鉄の扉が2枚あります。ここまでが旧館でそこから向こう(南側)が新館でわれわれが仕事している事務室です。事務室は1階ですが、窓から見える景色は2階です。溝口靖夫先生も次のように書かれています。「構造は旧館と同じく、鉄筋コンクリートで、地下一、地上四階一棟、建坪二一、二六七坪で延べ〇六、三三五坪の増設となっている。ただし、地下といっても、増築の部は南側の土地が少し低くなっているところに延長されたから旧館では文字通り半ば地下の室であったが、こんどはほとんど地上に出ているわけであり、事実上地上五階建てという形になっている。」

昔から図書館員なら誰でも知っていることなのですが、溝口先生は右のように書かれています。「こうして今のままで蔵書がふえるならば、次の増築も時の問題であり、これはどこの図書館でも避けられない必然性といいうる。これを考えて昭和八年の建築も今日の増築を予定してつくられたのであり、今度の増築も将来のそれを計画に入れているのである。創立百年祭前後の図書館は多分東西に増設を加えて、全体でH型をなすのではないか

と予想されている。」

ヴォーリズ博士は図書館の蔵書が増えていけば、南側へ文学部 2 号館方向に増築できるように設計していたのかもしれませんが。窓から文学部 2 号館を眺めながら、もしかしたらあのあたりで図書館の利用者の方々に本の花束をお渡ししていたのかもしれないとふと思いました。



撮影：吉永真理子

## <研究室から>

古庄 高 総合文化学科教授

私の研究についてご紹介します。私の専門分野は「教育学」です。教育学といっても実に幅広い分野があり、研究対象や研究方法は多岐にわたっています。私はこの 10 年、アドラー心理学を手がかりにして教育全体のあり方を研究しています。アドラー心理学は以前は「劣等感の心理学」として日本に紹介され、あまり注目されませんでした。10 数年前からやっと「勇気づけの心理学」として徐々に関心を集めるようになりました。理論はそれほど難しくありませんし、専門用語もあまり使いませんから、私のように心理学を専門としない者にも分かりやすい心理学です。そして、子どもの精神発達を理解するうえでは、非常に明快で実践に役立つ理論です。人間（子ども）には<できるようになりたい><もっと上手になりたい><優れた者になりたい>など、成長もしくは向上への強い欲求（優越性の追求）があります。それが教育可能性を示しています。また<集団に所属したい><集団の一員として重要な存在でありたい><必要とされる存在でありたい>などといった所属欲求があります。それが社会志向性（共同体感覚）を示しています。子どもの心には、優越性の追求と共同体感覚という 2 つの力が働いています。教育は子どもの優越性の追求を大切にしながら、共同体感覚を育てることにあると言ってよいでしょう。それが人類の福祉に貢献する有益な方向で、それぞれの力を最大限発揮することにつながります。

他方、日本の教育の現実には、不登校やいじめなど、多くの困難な問題を抱えています。

なかでも学習意欲の低下は深刻です。一部の子どもを除いて、家庭での学習時間が大幅に減少し、勉強意欲を無くしています。学力格差は大きくなるばかりです。

これらの現象の背後には、新自由主義的な教育政策、つまり学校や教師や生徒を競争させて数字によって評価しようとする考え方があると思います。教育は学校も教員も生徒もカリキュラムもテストも、すべて数値化され商品化されようとしています。しかし人間は競争にせき立てられた状態では、決して十分に力を発揮することはできません。どこか萎縮してしまいます。また、他人のことに関心を持ったり他人と協力したりする余裕もなくなってしまう。

競争原理の教育から協力原理の教育へと転換して、もっと生き生きと楽しく知識や人生に必要なライフスキルを学べるような教育に変えるべきではないでしょうか。そのためにはアドラー心理学が良い指針を与えてくれますし、最近では「協同学習」が広がっています。私も担当している授業のほとんどを協同学習の技法を数多く使いながら進めています。協同学習は仲間同士が能動的に学び合うグループ学習です。協同学習を導入することで大学の一斉講義形式の授業が大きく変わり、より主体的な学びが広がるのではないかと期待しています。

## <神戸女学院大学図書館架蔵フランス語書目雑談 V

### —ウシオー版『バルザック全集』全20巻（1855年）について—（その2）>

柏木 隆雄 元神戸女学院大学総合文化学科助教授、  
現在大阪大学名誉教授・放送大学大阪学習センター所長

#### 1. オノレ・ド・バルザックという作家

今回はヴィクトル・ユゴー『クロムウェル』初版（1828）に続いて、神戸女学院大学図書館架蔵の稀覯書のひとつ、私が専門と自称するフランス19世紀の小説家オノレ・ド・バルザック Honoré de Balzac（1799-1850）のウシオー版『バルザック全集』全20巻（1855年）Les Oeuvres complètes d' Honoré de Balzac, éd. Houssiaux を取り上げることにし、それに先だって、バルザック全集にまつわる思い出話に終始してしまった。

この書籍は、図書館の阪上澄子さんに伺うと、1982年（昭和57年）9月に図書館に入っているという。後にも述べる同じバルザックのオネットンム版全集（28冊の分）も同じ時の購入だ。つまり私が神戸女学院の助教授時代、1981年9月からパリに一年の留学をさせて頂いて帰国したのが、1982年の7月末。その2ヶ月後のことだから、いわば留学土産みたいなものと言えようか。

それについて、またしても、のっけから寄り道することになるけれど、その全集の購入時期を教えて頂いて胸に響くことがあった。というのも私は留学して帰った年の暮れに移籍の話があり、それが私の仏文学の恩師から母校へ帰る職だったので結局断りきれず、いささか無理を通して貰い、しかも「後ろ髪を引かれる思い」で翌年4月に移ったのだけれど、今回「雑談」を書くため阪上さんに教えていただいた全集の購入時期は、先述のとおり帰国して二ヶ月後。つまり留学中に買った本が届いたということになる（購入先も、この連載第一回に話をした私がたった一軒だけ品定めすることを自ら許したガストン・コラス書店）が、留学を終えて論文も書き、幸いフランスの老舗二ゼ書店からそれが出版されることにもなって、いよいよ本格的に腰を据えて勉強しようと、専門にしている作家の貴重な全集を2種類大学の図書館に入れたのだと思う。もって私の「後ろ髪を引かれる思い」も十分に察していただけるだろう。もちろん「後ろ髪を引かれる」のは、全集を図書館に入れて貰ったことばかりではない。

さてこの神戸女学院大学図書館架蔵のバルザック全集について、前回にも述べたことだが、それについて語るには、バルザックの人生、作品についておおよそのことを知り、またバルザックが自己の作品をどのように「全集化」していたかを知る必要がある。

1799年フランス中西部の都市トゥールに生まれたバルザックは、1814年一家がパリに移るのに従ってパリに出て、二年後、パリ大学法学部に入学、同時に書記として代訴人（弁護士に準じる訴訟手続きの代行人）の法律事務所で実務に携わる。しかし1819年法律のバカロレアに合格したものの、実務に就いてもらいたい家族の願いをよそに、文学者になる希望を表明した彼は、一年間と限って、パリはレスディスギェール通りの屋根裏部屋に陣取って、乏しい生活費をやり繰りしながらせつせと5幕の韻文『クロムウェル』Cromewellを書き上げた。（ユゴーといい、メリメといい、いかに当時クロムウェルが若い世代に大きな意味を持っていたかは、この連載第Ⅱ回に詳しい。）両親は彼の文学的才能の有無を裁定してもらおうよう、後にアカデミー会員となるアンドリュウ教授に戯曲の閲読を依頼したところ、教授はバルザックの文学的将来をきっぱりと否定した。

この冷厳な審判にもかかわらず、当のバルザックは初志を諦（あきら）めず、当時大流行していたウォルター・スコット流の歴史小説やルソーの影響を受けた小説、さらにローヌ卿とかオラスド・サン＝トバンといったペンネームで先輩作家と共同で大衆小説を1825年までの間に書きなぐる。この間、1822年にロール・ド・ベルニーという45才の女性に出会い、以後彼女はその死（1836）に至るまで、彼の愛人であり、母親であり、教育者であり、また出資者であり続けた。バルザックは夫人の愛情と庇護をえて1825年モ

リエール やラ・フォンテーヌ の全集を自ら解説を書いて出版、翌年印刷業の免許も取って本格的な事業を始め、更に活字鑄造の会社まで手を伸ばしたが、1828年10万フランの負債を抱えて倒産の憂き目に会う。そして再び文学で捲土重來を期した彼は、オノレ・バルザック と本名を署名して（彼の父親にならって、貴族を僭称するドを後につけることになる）『最後のふくろう党』という小説を書くとともに、彼が出入りし始めた社交生活の産物として、貴族、ブルジョワいずれもの家庭に起こる夫と妻と若い独身者のあいだの駆け引きを軽妙に描く中に、当代社会の欲望の構図を鋭く示し『結婚の生理学』を発表して文壇デビュー、1830年以降は、折から盛んとなったジャーナリズムに積極的にに関わり、幾つもの雑誌に短編小説を寄稿し、これらを私生活情景と総称した。彼の小説は多くの読者、とりわけ婦人の読者を得ることになる。

おりしも1830年代前半はブルボン復古王政が失墜し、ルイ・フィリップの立憲君主制を基本とするブルジョワ的体質の7月王政が発足、ジャーナリズムも発達してその政治的意見の表出と購読者獲得のために新聞、雑誌で文芸欄の役割が増大、バルザックもその機運に乗って多くの短編、中編小説を書きまくった。それらを集大成するべく、彼は1833年はヴェルデ書店と契約を結び、『19世紀風俗研究』12巻 *Etudes de Moeurs au XIXe siècle* を5年かかりで出版する計画を立てる。『ウジェニー・グランデ』 *Eugénie Grandet*(1833), 『田舎医者』 *Le Médecin de campagne*(1833), 『絶対の探求』 *La Recherche de l'Absolu*(1834), 『13人組物語』 *L'Histoire des treize*(1733-1835)などは、この時期いずれも評判となったものである。

しかし彼の小説家としての展開において最も画期的と思われるものは、1834年12月に『パリ評論』 *Revue de Paris* に連載し始めた『ゴリオ爺さん』 *Le père Goriot* だ。この小説において、彼はいわゆる「人物再登場法」 *Retours des personnages* の方法を確立したと言われる。すなわち、ある作品で登場した人物が、また他の小説でアイデンティティーはそのままに、その小説における役割の大小にかかわらず登場する仕組みで、ウォルター・スコットの「ウェヴァリー・ノベルズ」 *waverly novels* の手法にヒントを得たものというが、バルザックは、それをさらに組織的に、且つ意図的におこない、登場人物の総体が一つの「社会」 *Société* を構成することになる。まことに彼が当時の愛人ハンスカ夫人に宛てて(1844.2.6)「私はこの頭の中に一つの社会全体をそっくり持つことになるでしょう」 *«Moi, j'aurai porté une société tout entière dans ma tête»* と豪語するように、このシステムを俟ってはじめて人間喜劇の百編に垂(なんな)んとする小説群が有機的な繋がりを持つにいたった。アイデアのヒントはスコットながら、これを大々的に作家的意欲をもって作り上げたのはバルザックの天才にほかならない。

1834年から1839年にいたる5年間はベルニー夫人の死(1836)に見舞われはするが、ポーランド貴族のハンスカ夫人と結婚を約束しながら、頻繁な文通交際を続ける一方、パリで何人もの女性たちとも派手に交際する華やかな社交生活も享受し、各地に旅行を試みながら、『谷間の百合』 *Le Lys dans la vallée*(1835), 『セザール・ピロトーの栄枯盛

衰』 Histoire de la grandeur et de la décadence de César Birotteau (1837), 『夢やぶれて』 Illusions perdues(1834-1839), 『ニュシングン商会』 La Maison Nucingen(1838)などの傑作を発表して、その技倆の円熟を示した。

## 2. 『人間喜劇』の構想

1840年から41年にかけては、バルザックの世界が更に深さと厚みを増し、完成期に入る時期である。1841年、バルザックはフルヌ Furne, デュボシェ Dubochet, エッツェル Hetzel およポーラン Paulin の各書店と『人間喜劇』全17巻の出版契約を交わし、翌42年から刊行を開始する。この時付されたのが有名な「序文」 Avant-propos だ。この総序の出来る経緯には次のような話がある。出版者のポーランとエッツェルはロマン主義の先駆けであり、当時の大御所となっていたシャルル・ノディエ Charles Nodier(1780-1844)にもともと依頼したかったのだが、現在引退気分中の彼には断られることを予想して、バルザックと同年令で法学部同窓のジャーナリスト、ロール Jacques-Hyppolite Roll(1799-1883)に序文執筆を頼む。ロールは依頼どおり書き上げたが、バルザック本人は気に入らず、出版者達の懇望にもかかわらず旧友のところに足を運ばずに、ジョルジュ・サンド George Sand (Amadine Lucie Aurore Dupin, baronne Dudevant, 1804-1876)に執筆を依頼した。引き受けたもののサンドは病に臥して、すぐにはできないとの返事、やむを得ずバルザックは、夭折した友人フェリックス・ダヴァン Félix Davin(1807-1836)が先述の1834年刊の『19世紀風俗研究』の第一巻に収めた序文(大抵はバルザック自身の意図が入ってはいるが)を再び巻頭におこうと提案するが、これは出版者たちに容れられず、結局自分自身で執筆することになった。

この「序文」についてマドレーヌ・ファルジョーの「もちろん、この『序文』を知ることとは『人間喜劇』の小説を一つ、あるいはその全体を読むのに不可欠というわけではない。しかしこの文章はあまりに短すぎる一生のその絶頂期に書かれ、バルザックが意識していた最も重要なものを包み込んでいるように思われる。これを読めば作品の読解がはるかに豊かになり、この新しいプロメテウスの天才を、その創造力の顕現のなかに明瞭に見ることが出来る。」(プレーヤッド版『人間喜劇』第一巻 p.5)という言葉を紹介しておこう。

「人間喜劇」という総タイトルが初めてバルザックのペンに上ったのは、1840年1月の出版者レオン・キュルメール Léon Curmer に宛てた書簡においてだが、バルザック自身は、ほぼ13年前から、即ち1829年の『ふくろう党』以来、自分の作品群を19世紀の社会を写す記念碑としたい野心を持っていたことをその「序」で明言する。1845年に示した宣伝カタログに『人間喜劇』全137編が詳細にわたって示されているが、「序」文においても次のように宣言しているのである。

一時代に現れた二三千人の特徴ある人々を描き出すのは容易なことではなかった。というのもそれはそれぞれの世代がしめす様々なタイプの総和に他なら無いからであり、そうしたタイプを『人間喜劇』は包含することになるのである。こうした多数の人物、その性格、その様々な生き様は、それぞれ額縁が必要であって、こういう表現を許していただけるなら、そのギャラリーが必要となるのである。そこでまことに自然な成り行きでご承知のとおり、その区別を私の仕事に施すわけで、「私生活情景」、「地方生活情景」、「パリ生活情景」、「政治生活情景」、「軍隊生活情景」、そして「田園生活情景」といった各情景ができあがる。この6巻に「風俗研究」のすべては分かたれるのであって、それはこの社会の全般的な歴史、あらゆる勲功と武勲、と我々の祖先なら言いそうなものの総体を形成する。これら6巻はまた概括的なイデーに相応ずる。それぞれの意味があり、含蓄深く、人間の一時代を表明する。(中略)「私生活情景」は幼年期、青年期のその過ちを表現し、「地方生活情景」は情念と打算と利害と野心の世代を示す。それから「パリ生活情景」がしめす画は嗜好や悪徳、さらにはあらゆる行き過ぎたものすべてを示してそれらは首都に特有の風俗が引き起こすものであって、首都という場合は、極端な善と極端な悪が一度に相会うところなのだ。

引用で十分窺われるように、ここには、バルザックの世代感、歴史感、空間認識がきわめてポレミックにストラテジックに語られている。ここに語られたことの意味と実際の文学的表現の成果については、各作品の具体的な読解を通じて検証されよう。1845年のカタログに予定されている137の作品(実際は91)では、3000から4000人が登場することになっていたが、5年後の作者の死(1850年。享年51歳)によって結局2000人程にとどまった。この創作カタログを示したその時点から、バルザックは謂(い)わばそのカタログに未刊と記してあるものを、補うかたちで創作に勤(いそ)しむことになる。

『人間喜劇』のプランを発表するのと同じ1841年の1月、かねて結婚を約束していたハンスカ夫人の夫の死が伝えられると、莫大な財産をもつ夫人との結婚を焦るバルザックは、絶え間ない創作の合間、健康の俄かに衰え出したのにもかかわらず、しばしばウクライナの夫人の領地に出掛けて共に過ごす時間を多く持とうとした。1843年、ペテルスブルグ、1845年ドレスデン、ハンブルグ、プルテンベグ、パリ、トゥール、そして彼のさしもの強靱な体力も次第に衰えをみせ、加えて心臓の発作に苦しむようになる。1846年ローマからフランクフルトへの旅行を夫人と企てるが、待ちに待っていた彼女との間に出来たはずの子供は死産という彼女からの報せを受け、おおいに失望する。さらに夫人は依然として彼との正式な結婚を肯(がえ)んぜず、精神的にも、肉体的にも苦しい状態が、以後死に至るまで続くことになった。この時期に最後の名作『貧しき縁者たち』Les Parents pauvresの二部作、『いとこベット』La Cousine Betteと『いとこポンス』Le Cousin Ponsが書かれる。1848年からは夫人のウクライナの領地まで出かけ、1849年には病にしみながら一年中そこで過ごして、彼女に結婚を強く迫った。ようやく1850年3月キエフのベルチチェフの教会で晴れて念願の結婚式をあげて、パリに戻るのだが、新婚の二人がパリの自宅に到着した時には、家政婦が精神に異常を来していて、門を開けず、新

婚夫婦は新居に入ることが出来なかつたりした。彼の健康は楽しいパリ生活の享受を許すどころか、着後、たちまちベットに就き、ついに8月18日、詩人ユゴーが見舞ったその夜不帰の客となるまで、ついに立つことはなかった。

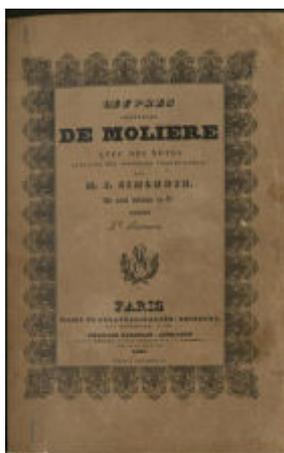
### 3. 「全集」への執念



以上 Balzac の生涯を垣間見ただけで、彼が自分の著作を「集大成」する意欲を終始持ち続けていたことが理解できるだろう。じっさい彼が法科大学を出たあと、六才年長の大衆作家ル・ポワトヴァン・ド・レグルヴィルと知り合い、彼やその仲間たちと協力しあいながら、大衆小説を書きなぐったことは既に述べたが、それらさえ、彼が一応小説家として成功すると『初期小説全集』のような形で出版した。（これもビブリオフィル・ド・オリジナルから復刻されている。）第一、彼がそうした大衆小説から撤退して出版社を始めた際にも、取り上げたものはモリエールやラ・フォンテーヌの一冊本の全集の企画だった。この全集はコンパクトな一巻本でしあげるもので、あたかも前回、スイコ版フランス文学の巨匠たちのコンパクト判全集の話をしたけれども、その趣(はしり)と言ってよいものだ。バルザックが最初に発行した個人全集は、1826年の『ラ・フォンテーヌ全集』だが、3000部刷って売れたのはわずか20部。今ひとつの『モリエール全集』も惨憺たるありさまだった。

『ラ・フォンテーヌ全集』　じつはその『ラ・フォンテーヌ全集』（図版参照）を昔手に入れて、バルザックの講義や講演の際に示して見せることがある。赤いカルトンの表紙の、A5判を細身の縦長にした八折り本のこの本は、売れた20冊のうちの1冊だろうか。あるいは破産したバルザックの財産整理をした本屋から売れ残りとして出たものか。本の扉には『ラ・フォンテーヌ全集』とあって、ドヴェリア画、トンプソン彫版のラ・フォンテーヌの肖像画があり、左の白い頁に出版者バルザックと印刷して住所も付してある。バルザックが巻頭に書いたラ・フォンテーヌの生涯は、小さくともまだ読める大きさの活字だが、本文の活字は、いわゆるミニヨンヌと呼ばれる7ポイント（たて横一ミリ弱）のごく小さいもので、しかも縦長の紙面に二段に印刷されているのできわめて読みにくい。ラ・フォンテーヌの名作『寓話』のように比較的短く、余白も多少あるもの、我慢すればなんとか

読み進められるが、『プシケーの恋』といった長編はよほどの忍耐が必要だろう。内容は『全集』とうたっているだけに、全495頁、先ほど述べたパリのスイコ社が発行している一巻本全集とそれほど大差はない。スイコ版は安い価格が売り物だが、バルザックの一巻本全集は価格もさうとう高かった。こういう手の本は高ければ売れるわけがない。



『モリエール全集』

この極細の活字の全集本は、この本を私自身が手に入れることになって、講義の際この本をかざしながら、アイデアは良かったが、実用に向かないバルザックの失敗、とずっと話してきたが、つい3年ほど前、バルザックが出版を手がけるにあたっていろいろ助力を仰いだ出版者ユルバン・カネルが1826年に出した『モリエール全集』（図版参照）を購入してみると、まったく同じ体裁で、印刷活字も同じように極く細かいものだった。つまりはカネルのアイデアもあっての出版と考えることもできるわけだ。（実はこの全集、オークションのカタログで見たときに、発行年代が1826年とバルザックが出版者として出したというカネルだと思いこんで、値を付けたのだが、案に相違してその先達カネルの出版になるものだった。バルザックが刊行したという『モリエール全集』は本当に実在するのか？とふと思うことがある。）バルザックの3年あまりの出版事業は、こうしてあまりに無残な結果に終わることになる。多くの批評家や研究者は、バルザックの空想の大きさと現実との齟齬をいう。事業家としての迂闊(うかつ)さを、のちに作家バルザックが築きあげた『人間喜劇』の壮大な宇宙と比較して、ほほえましく捉えたりする。しかし彼を、多大の借金をかかえながらなお活字の世界へのめりこませていったものは何だったのか。出版から印刷、活字鋳造へとバルザックが辿った「本を柱とした実業家」の道筋は、ある人のいうように「論理的」ではあるが、そこには単なる金儲けの筋道を立てただけでないようなものが感じられるのだ。元へ、元へ、原理へ、原理へとつきすすんでいくバルザック本質的なものがそこにはっきりと現れているような気がする。

できあがった本から、組版へ、そしてひとつひとつの活字へ、その活字の形さえまだ与

えられていない鉛の湯へ。バルザックの精神は、ひたすら、文の、言葉の初源へさかのぼった。あたかも彼がのちに描く『絶対の探究』のバルタザール・クラスがあらゆる家族の犠牲をかえりみず、「絶対」という宇宙の根源をなす物質を求めていったように。『知られざる傑作』のフレノフェールという希代の画家が絵画の絶対を求めて自らさえも犠牲にしたように。失敗した一巻本全集のアイデアさえ、作家のすべてを一冊の本の中に凝縮してつきつめていく、というところがバルザックの心をとらえて離さなかったのではないか。まるで点にしか見えない活字の黒い集積のなかに、彼はその作家の根源を見ようとしたのではあるまいか。

しかし、こうした根源へと遡る彼の芸術的野心は、同時にそれらを統合する大きなイデーと何ら矛盾することはなかった。否、そうした根源を問うことによって、それらの集成こそが、バルザックの最終的な哲学の帰結として編まれるべきものとなる。ラ・フォンテーヌ又全集のごくごく小さな活字を集めて、彼のすべての作品を一冊の本に網羅し、それをもってラ・フォンテーヌの宇宙を現出させようとしたように、バルザックは、自分の個々の短編や中編を、それぞれのイデーに基づいて、再編、集成して、作品群を、それぞれに名を付けて世に送りだそうとする。それは彼が本来の作家活動を始めた 1830 年から既に始まっている。いわく『私生活情景』と名付けた小説集であり、『哲学的小説集』であり、それらをさらに組み直した『19世紀風俗研究』12巻であり、さらには 1841 年の『人間喜劇』(実際に生前刊行されたのは全 17 巻)へと結実するものである。それらはその時々々のバルザックの「全集」と言ってよかった。

神戸女学院大学図書館架蔵のウシオー版『バルザック全集』全 20 巻は、いわばそうしたバルザックの全集への執念の最終的な形を示す一つの形である。次回はバルザックのそうした個人的『全集』への努力の跡を見ていきたい。